

激動の世紀

一戦犯憲兵の回想

谷口武次



巢鴨出所帰宅直後玄関前（昭27. 4. 10）

予備士官学校時代（後列左端）
（王城寺原日の出山）



見習士官時代



前列中央右 谷口



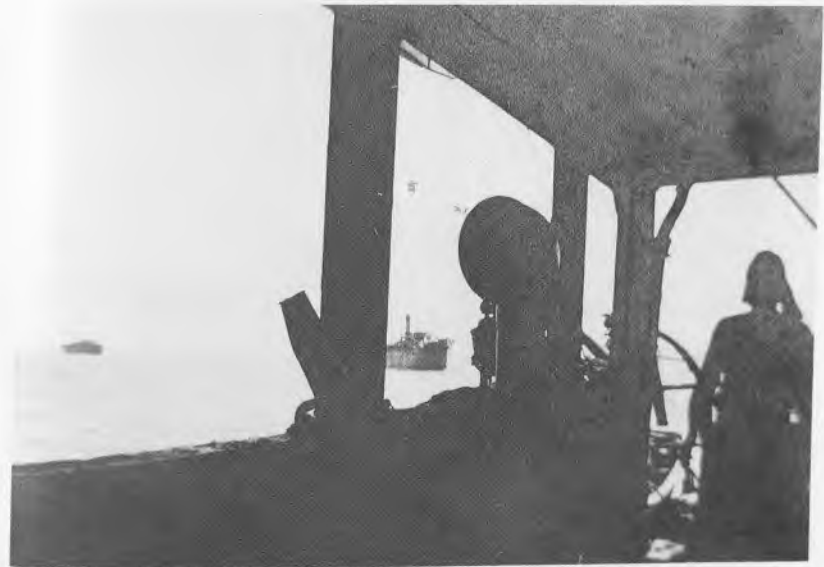
バンタム湾上陸



出征記念 自宅玄関前



セラン街道 (爆破された倒木タマリンダは工兵隊により撤去後)



輸送船



ボゴール官邸正面



爆破されたボンチャック峠への道（左端）



ボゴール植物園の一部



ボゴールサラク山の遠望

浜田曹長（向って左）



第16軍憲兵隊本部正面（手前の鉄扉はなかった）

タイピン刑務所正門



ジャワ風景



チピナン刑務所正門



第二十九軍憲兵隊本部



バタビア戦犯法廷 2 (谷口)



チャンギー監獄(刑務所) 右方の塔は時計台、角の白壁は見張り所。その対岸後方は獄舎三階。古蹟中は連合国人が、終戦後は日本人戦犯が収容され、133名がこの中の絞首台に消えた。(内二名他所で銃殺) 現在シンガポールに連合国人約400名を収容

チャンギー刑務所



日南市飴肥旧藩主 伊東祐淳氏 (左)



西村正守、明石正一、早川久也 各氏

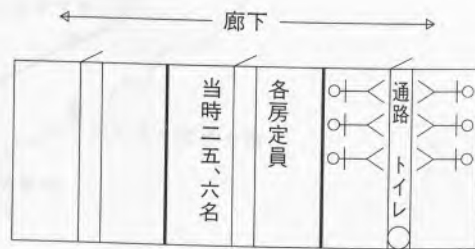
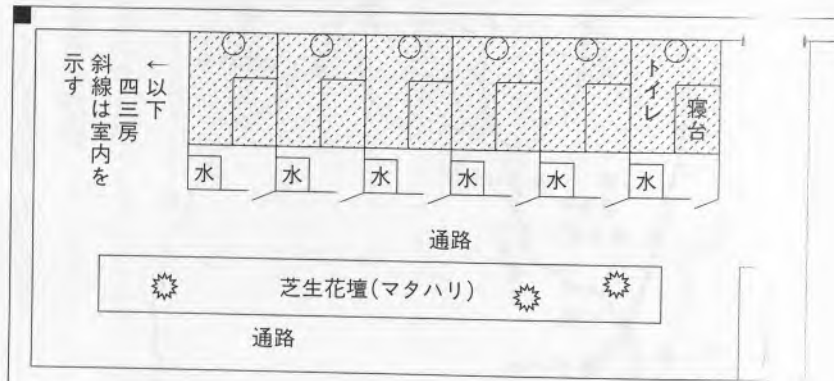


マライバンコール島岬の夕景 (136部隊潜入地点)



左端閩軍アジト 四軒目陳平生家 (タバコ西岸ステアワシ)

独房(死刑囚房)見取図

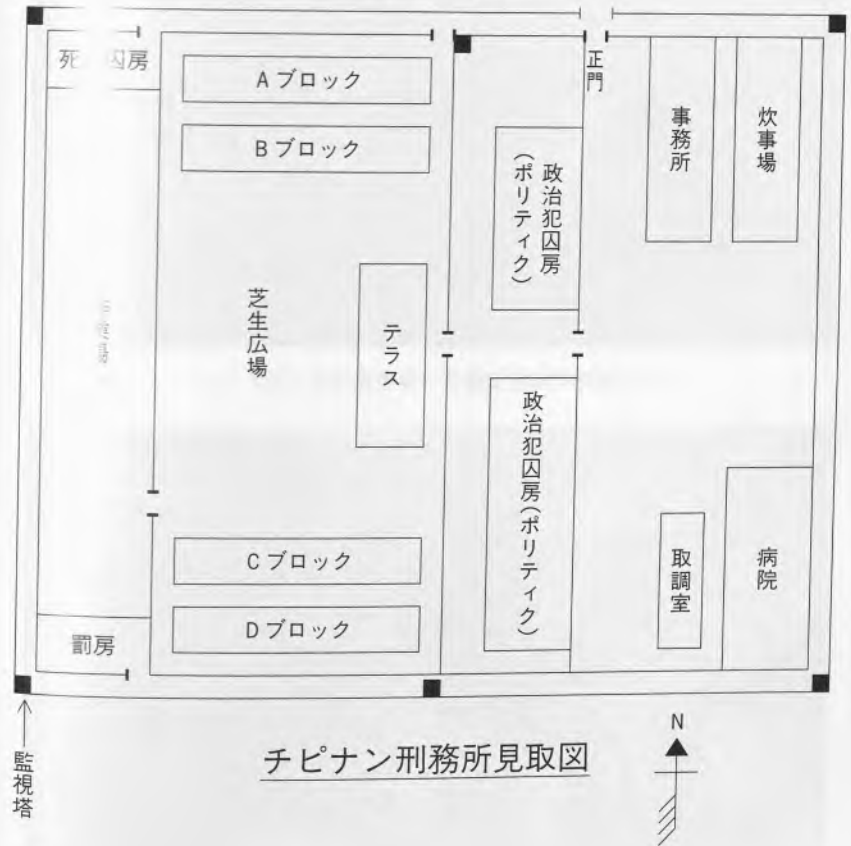


各ブロック一般雑居房見取図

至 タビヤ

至クラワンスラバヤ

タラワン街道



チピナン刑務所見取図

マレーシア略図



目次

まえがき

第一部 軍隊生活

- 1、召集令状 7
- 2、入隊 8
- 3、陸軍予備士官学校 11
- 4、陸軍憲兵学校 17
- 5、出征 27

第二部 波濤を超えて

- 6、大連出港 33
- 7、高雄—佛印カムラン湾 37
- 8、南十字星—最後の航海 43
- 9、ジャワ・バンタム湾奇襲上陸 46

10、軍司令官重油の海を泳ぐ	52
11、セラシム進入	57
12、ボイテンゾルグ進入	63

第三部 軍政と憲兵

13、ボイテンゾルグ憲兵隊	79
14、ジャカルタ憲兵隊本部	87
15、ボゴール憲兵分隊	109

第四部 マレーシア作戦

16、第二十九軍憲兵隊戦闘隊	141
17、馬來共產党抗日軍と治安状況	144
18、一三六部隊との戦い	148
19、グreek作戦	156
20、タパー作戦	168
21、終戦と最後の出勤	174
22、馬共抗日軍第五大隊長陳平工作	182

第五部 終戦行

23、英軍進駐とサラクノース集結	195
24、暁の非常呼集	198
25、タイピン刑務所	200
26、チャンギー刑務所	213
27、ジャワ・チピナン刑務所	216

第六部 戦争犯罪裁判

28、東京裁判	219
29、B・C級裁判	234
30、一〇・一二事件	238
31、三・二六事件	241
32、日本人自治管理委員会	249
33、取調べと虐待行為	253
34、バタビア憲兵分隊公判	260
35、ボゴール憲兵分隊起訴	263

36、	ポゴール憲兵分隊公判	268
37、	独房・死刑囚房	285
38、	ポゴール憲兵分隊判決	289
39、	再び独房へ	293
40、	刑務所事務所勤務	295
41、	バタビア憲兵分隊訣別	297
42、	ポゴール憲兵分隊訣別	307
43、	一〇・二六事件	316
44、	忘れ得ぬ人々	321

第七部 チピナン刑務所の生活

45、	日本人一般棟の生活	329
46、	今村大将チピナン移送	338
47、	山本茂一郎少将公判	344
48、	今村大将公判	348

第八部 帰国 巢鴨へ

49、	オンルスト島	369
50、	さらばジャワ島よ	391
51、	巢鴨拘置所	409
52、	出所復員	412

あとがき	415
経歴書	420
参考文献一覧	423

附 録 『チピナン日記』	427
--------------	-----

激動の世紀

一戦犯憲兵の回想

まえがき

うららかに晴れ渡った東雲の空にたなびく豊旗雲を黄金色に染めて、今しも元日の太陽が光彩陸離、匂い静かに地平を離れようとしていた。

平成七年一月元旦、森羅万象のいのちの歡喜が、空のまほらに将然として鳴り響くようなおらかな美しい朝明けであった。

八十一才のこの元日の日の出に向かって心静かに激動の来し方を憶う時、よくも今日迄生き永らえて来たものだと思ふ心がしきりに去来した。激動の世紀はそのまま私の生きた青春の歴史である。時將に皇紀二六五五年（一九九五）、戦後五十周年の節目である。

あの激動の時代から新生日本へと脱皮する世の歴史の中を、ひたすらにいのちを込めて生きて来たうつぼつたる闘志が、五尺の小軀の腹の底から湧き上がって来るのを抑えかねて、思わず身振りしながら一人ペランダに立ちつくしていた。

昭和十三年（一九三八）八月一日、召集令状を受けて、都城歩兵第二三聯隊補充隊西部十七部隊

に入隊してから、昭和二十七年（一九五二）四月三日巢鴨出所の日を以って復員したが、思えば十五年間に亘るこの間の私の行動については、私を知る少数の戦友達の外誰一人として詳しく知ってゐる者はいない。復員後父母兄弟にさえ、又今日まで妻や子供達にさえ、いのちをかけて祖国のために戦つて来た青春の歴史のその間の一片だに話をして来たことはないように思う。

復員の喜びと解放された安堵に戸惑つてゐる一人の憲兵戦犯者を、温かく迎え入れてくれた家族や同じ集落の人々の平和な生活と環境の中に唯一人安住して、過ぎた激動の時代の話の糸口さえも呆然として切り出す術はなかった。言うなれば戦犯ボケ、刑務所ボケである。

自分としてはあれもこれもと話したいこと、聞いて貰いたいことが胸に渦巻き、誰か早く切り出してくれないかと内心ウズウズしていたが、不思議にも誰一人として聞こうとしてはくれなかった。そうして今日になった。私には後ろめたいことも又世間に憚ることも何一つないが、今にして思えば、特に当時最も悪名高い憲兵の、しかも戦犯として最後に巢鴨を出たことで、どのような心の痛みや重荷のあるやも知れず、皆私の心中に触れることを遠慮して意識的に避け、私の過去に触れることは禁句であつたのではないかと思う。

勿論悪意ではなく、周囲の温かい環境に育まれ、漸く心の平安を取戻そうとしてゐる私への、いたわりの、善意の温かい心の配慮であつたのだと今しみじみと思ひ返されるのである。

昭和二十七年四月、巢鴨を出て郷里の日南市飢肥に帰つた時、同じ集落の大勢の人達が広木田のバス停に恰かも凱旋兵士を迎える如く盛大に出迎えて頂いた。全く予期しない光景に驚き感激した

が、続いで自宅での歓迎宴の席上挨拶でも一通りの戦歴を話ただけであつた。勿論、戦犯の詳しい内容等話す時間もなかつたが、今にして思えばあの時自分の戦犯関係の要点だけでも話しておくべきであつたと悔まれる心が今しきりである。

帰宅後しばらく静養の期間があり、父母とも落着いて話をする機会はいくらでもあつたのに、何時も私の出征中の生活や出来事、その後の集落の人々の消息等、そういう話を中心にはずみ私は終始聞き手に回つて、私自身のこと、特に戦犯については遂に一度も話題に上ることはなかつた。

思えばそれほど私は温かく迎えられていたのである。

帰宅してから或る日、同居していた義兄、三橋の許に学校の先生方が数名来訪されたことがあつた。談笑の中に私の「戦犯は何であつたのか」との質問に対して義兄は「戦犯のことは余り話したくないようだ」と答えているのを偶然室外を通りかかった私は耳にした。これはいけない。話を聞いて貰いたくてウズウズしているのと残念がったが、割つて中に入るのも遠慮された。

折角の機会を又も逸してしまつた。

数年前私達はマレーシア第二十九軍憲兵隊時代の戦友達と回顧録『マライよ遥かなり』を上梓した。その中にマレーシア戦場における私の作戦行動や終戦後の状況を書いた数編があり、私の戦犯裁判のことについては何一つ触れていないが、私の戦歴を少しでも知つて貰いたくて、妹、親戚、友人達にそれぞれ一冊を贈つた。

数日後、久留米市在住の末妹吉永節子よりお礼の電話と共に「初めてお兄さんの戦争中のことが

分かった」と非常に喜んでくれた。

それほど私の激動の歴史については誰も全く知らなかったのである。

この回顧録にあるのは私の戦歴のほんの一部でしかなく、肝心のオランダ戦犯のことについては全く白紙であったのだが、それでもこのように喜んでくれたのを見て、私は誰にも聞いて貰えず、永年わだかまっていた胸の大きなつかえが一時に下りたようで、その嬉しさに思わず涙が溢れた。

この時「やはりこの儘ではいけない。全部を書き残して明らかにしておくことは私の責任でもあり又義務であろう」と心中深く期するものがあつた。

自分史と言う程のおこがましい考えは更々ない。又これを公にするつもりも毛頭ないが、私の激動の過去の歴史を手記に残そうという考えは早くからあつた。併しなかなか手がつかない。何遍か思つては手をつけず、取りかかつては止め今日まで来た。

身辺漸く落着き、且つ八十一才の齡を迎えては今においてもうその時間はない。

幸いに今年には戦後五十周年。記憶も足跡も漸く砂漠化しようとしているが、現代史は五十年を経て初めて歴史の範疇に入ると言われている。世紀の正しい歴史認識の上に、日本の真にあるべき姿を今改めて見直さなければならぬ大きな節目のこの年に、青春のいのちを燃焼し尽くして激動の世紀を生き抜いて来た私達の歴史の一面を残すことも亦一つの意義があろうかと思う。

そういう交々の思いを込めて、私は思い切つて決起の筆を起すことにした。

戦争の体験は勿論何も私に限つたことではない。併し私共は光輝ある日本の命運を担う純粋な国

民の一人として、今は亡き多くの戦友や刑場に消えた同志と共に、唯一つのいのちをかけて祖国のために戦つたのであり「侵略の走狗」となつて戦つた覚えは一度もない。

勿論多くの反省はあるが、いのち一すじに生きて来たと思う一老兵の手記が、憲兵として戦つた戦歴と共に戦犯裁判の実相を語り継ぎ、歴史的にそれが何であつたかを一人の身内の人間の生き様を通じて捉えておいて貰えば幸いこれに過ぐるものはない。

父母は既に世にない。併し今日まで私を夫として、父として、兄として、又一人の人間として、温かく力強く支え励ましてくれた妻と子供達、二人の妹、多くの親戚、友人諸兄及び郷里の人々に對し、この拙文をも省みず心からのお礼と真心を込めて贈る。

最後に不肖不徳、心ならずも戦地を含めて多くの人々に有形無形の多くのご迷惑をおかけしたことを深くお詫びしたい。

本書を謹んで父母と亡き戦友のみたまに捧げる。

平成七年一月一日

谷口武家